

「堰根祭」の沿革・由来

山城堰は、藩政期に秋田へ移封（1602年）となった佐竹家の分家佐竹山城守（東家）が、指紙開と称する開発許可（1619年）を得て以来、四代にわたって知行地の開田を進めるため開削した用水路であり、完成まで58年の歳月が費やされたと記録されております。

特に、四代義寛の代（1644年）に本格的な工事が着手され、12年後の1676年に苦心惨憺の末ようやく竣工をみたもので、知行地支配佐竹山城守の名をとって「山城堰」と呼ばれております。また、開削と開田によって広がった灌漑区域が十日町・袴形・板井田・中田新田・内小友の5ヶ村に及んだことから別名「五ヶ村堰」とも呼ばれております。

開削当初は「草止め」と称する土俵・木杭・柴などを使った雄物川の一部締切りによって取水していたようですが、開削が進んで面積が増えるにつれて川幅全部（約300m）を締切るようになり、使用された材料は土俵3万表、杭2万本、柴2千束を主としていた記録があり、冷たい雪解け水の中での作業は大変な難工事だったろうと推測されます。

毎年このような「草止め」の難工事を経て通水できることは大きな期待と喜びだったと思われるものの、苦勞の末に造った「草止め」も洪水の度毎に流失され造り直さなければならないことを考えると、灌漑期間中の通水の無事を神仏に祈願することは必然的な行いであり、これが「堰根祭」として定着したものと考えられております。

明治期に入って普通水利組合組織になると委員制となり、「旦那衆」と呼ばれる地主達の組合になって、「堰根祭」には花火も打ち上げられ、近隣の料理屋からは大勢のお酌さんが集められる程盛大に催されたようで、取水口に近くしかも「草止め」工事の重要作業を担当していた本郷地区では、時ならぬお祭り騒ぎにおおいに賑わったと伝えられております。

昭和26年の組織変更による土地改良区になって以来、歴代理事長をはじめとする役職員や組合員の努力、更には関係機関のご高配による各種事業の実施によって施設も近代的なものとなりましたが、通水の万全を願う気持ちは今も同じであり、先人達の苦勞を顧みることと水の有難さを後世にも伝えることの使命感を引継ぐことで300年以上もの歴史ある「堰根祭」が続けられているものであります。